卓　　話

平成 20 年 3 月 4 日

耐震偽装と建築業

岐阜中ロータリークラブ
小林和也会員

建築物は人々の生命、財産、自尊心、公共性を共有する文化的存在であると思います。
姉葉事件はそんな建築物の存在を否定してしまった事件であり、姉葉元建築士が行った構造計算耐震偽装は決して許される事ではありません。

一級建築士という資格者である彼が何故そんな行動をしたのかを振り返ると、昨今の食品偽装、製紙偽装等共通する点があります。
バブル経済崩壊以来全ての業界で会社は企業維持の為のデフレ状況にも似た価格競争に突入し、それに伴って人件費の減額、経費節減等模索していたが遂には限界を既に超えてしまった中、心ならぬ者、経営者が偽りの行動をしてでも現状維持をするために偽装行為を行った結果であったと思います。

ご承知の通り、建築物を建設する場合、建築確認申請を行いその申請内容を行政機関、または、委託された民間確認検査機構が審査し合格を得た上で建築物を建築することとなっています。
とりわけ、建築物構造は地震国日本では世界一基準値が高い国であり阪神淡路大地震以来特に注視されてきています。

では何故、構造計算耐震偽装が発生したのか。
まずは、失礼ながら審査を行う実務者の技術水準の低下、または、予期できない、予期しない、まさに、無頓着さがあるかと思います。例えば、実務経験はなくとも高学歴を履修したエリート故に国土交通省が認定したプログラムで以って構造計算がなされていれば、そのプログラムがまさか偽装されるわけはないと疑わず、つまりは、一目してこれは変だと感じない盲目さの現れだったと感じました。皮肉にも、姉葉元建築士が行った行為は決して許されませんが、彼の実務経験がそれを逆手にとってしまった結果はあまりにも悲しい出来事です。
こうしたアンバランス感は今の不景気感の象徴であり、本来、能力ある技術者が生業を捨てるような目先の生活の為にあってはならぬ行動に走り、更に悲しい事実はそれをいち早く見抜く立場の技術者がそれを見抜けず、発覚すると利害関係のない人々を巻き込んでしまう最悪のスプロールとなってしまっていることです。
誰もがそれぞれの立場でそれぞれの責務を果たし、社会貢献しようと努力していると思います。

小さな勘違い、現場を見ることなく机上のやり取りが優先してしまったことが過去にあったにも拘わらず、今また同じ過ちを繰り返していると思います。今一度、足元を見つめ直し、人は無駄だと思えることを屁理屈で否定することなく、心豊かにしたいと感じています。